

関数解析 I レポート

基礎工学研究科システム創成専攻修士 1 年

学籍番号 29C17095

百合川尚学

選択番号 [4][5][6][9][11][12][13]

2017 年 7 月 31 日

(約束及び定義)

- 係数体は複素数体 \mathbb{C} .
- 位相空間 X, Y に対し, $C(X, Y) = \{f \mid f \text{ は } X \text{ から } Y \text{ への連続写像}\}; C(X) = C(X, \mathbb{C})$. $C_b(X) = \{f \in C(X) \mid f \text{ は有界}\}$ は $\|u\| = \sup_{x \in X} |u(x)|$ をノルム (sup-norm) として Banach 空間である.
- s を複素数列全体のなす線形空間とする. $l^\infty = \{a = (a_n)_{n=1}^\infty \in s \mid \|a\|_{l^\infty} = \sup_n |a_n| < \infty\}$, $c_0 = \{a = (a_n)_{n=1}^\infty \in s \mid \lim_{n \rightarrow \infty} a_n = 0\}$. このとき l^∞ は $\|a\|_{l^\infty}$ をノルムとして Banach 空間である.

[4]. $k \in \mathbb{N}_0$, $I = [a, b]$ とする. $C^k(I)$ は $|f|_k = \sum_{j=0}^k \sup_{x \in I} |f^{(j)}(x)|$ をノルムとして Banach 空間であることを示せ.

証明. 以下の手順で示す.

- (i) $|\cdot|_k$ が $C^k(I)$ におけるノルムである.
- (ii) $C^k(I)$ の $|\cdot|_k$ による Cauchy 列を取ると, 各 $j (= 0, 1, 2, \dots, k)$ 階導関数列に対し或る I 上の連続関数 f^j が存在し, j 階導関数列は f^j に I 上で一様収束する.
- (iii) 各 $j = 0, 1, 2, \dots, k-1$, について f^j は I 上連続微分可能で $f^{j+1}(x) = \frac{d}{dx} f^j(x) (\forall x \in I)$ が成り立っている.
- (i) $f, g \in C^k(I)$ と $\alpha \in \mathbb{C}$ を任意に取る. 正值性 $|f|_k \geq 0$ は右辺の各項が ≥ 0 であることから成り立つ. また $|f|_k = 0$ の場合, 右辺で $\sup_{x \in I} |f^{(j)}(x)| = 0 (j = 0, 1, 2, \dots, k)$ が成り立ち, 特に f は I 上で零写像であるとわかるから $f = 0$ である. 逆に f が I 上で零写像ならば全ての導関数が零写像になるため右辺は 0 になり, 従って $|f|_k = 0$ となる. 同次性は

$$|\alpha f|_k = \sum_{j=0}^k \sup_{x \in I} |(\alpha f^{(j)})(x)| = \sum_{j=0}^k \sup_{x \in I} |\alpha f^{(j)}(x)| = \sum_{j=0}^k \sup_{x \in I} |\alpha| |f^{(j)}(x)| = |\alpha| \sum_{j=0}^k \sup_{x \in I} |f^{(j)}(x)| = |\alpha| |f|_k$$

により示される. 三角不等式は

$$\begin{aligned} |f + g|_k &= \sum_{j=0}^k \sup_{x \in I} |(f + g)^{(j)}(x)| \\ &= \sum_{j=0}^k \sup_{x \in I} |(f^{(j)} + g^{(j)})(x)| \\ &\leq \sum_{j=0}^k \sup_{x \in I} |f^{(j)}(x) + g^{(j)}(x)| \\ &\leq \sum_{j=0}^k \left(\sup_{x \in I} |f^{(j)}(x)| + \sup_{x \in I} |g^{(j)}(x)| \right) = |f|_k + |g|_k \end{aligned}$$

により示される.

- (ii) $f_n \in C^k(I) (n = 1, 2, 3, \dots)$ を $C^k(I)$ の $|\cdot|_k$ による Cauchy 列とする. 任意の $\epsilon > 0$ に対し或

る $N \in \mathbb{N}$ が存在して全ての $n, m > N$ で

$$\epsilon > \|f_n - f_m\|_k = \sum_{j=0}^k \sup_{x \in I} |f_n^{(j)}(x) - f_m^{(j)}(x)|$$

が成り立っているから、各 $j = 0, 1, 2, \dots, k$ について $(f_n^{(j)})_{n=1}^{+\infty}$ は sup-norm に関して Cauchy 列をなしている. $(C(I), \text{sup-norm})$ が Banach 空間であることが認められているから、各 $j = 0, 1, 2, \dots, k$ についてそれぞれ或る I 上の連続関数 f^j が存在して、 $(f_n^{(j)})_{n=1}^{+\infty}$ は f^j に sup-norm で収束、即ち I 上で一様収束する.

- (iii) 上で取った $(f_n)_{n=1}^{+\infty} \subset C^k(I)$ について、全ての $n \in \mathbb{N}$ と $j = 0, 1, 2, \dots, k-1$ に対して次の関係が成り立っている.

$$f_n^{(j)}(x) - f_n^{(j)}(b) = \int_b^x f_n^{(j+1)}(t) dt, \quad (\forall x \in I).$$

ここで (ii) の結果から、任意の $x \in I$ と $\epsilon > 0$ に対し或る $N = N(j, \epsilon) \in \mathbb{N}$ が存在して全ての $n > N$ で

$$|f^j(x) - f_n^{(j)}(x)| < \frac{\epsilon}{3}, \quad |f_n^{(j+1)}(x) - f^{j+1}(x)| < \frac{\epsilon}{3(b-a)}$$

が成り立つようにできるから、同じ n について

$$\begin{aligned} \left| (f^j(x) - f^j(b)) - \int_b^x f^{j+1}(t) dt \right| &= \left| (f^j(x) - f^j(b)) - (f_n^{(j)}(x) - f_n^{(j)}(b)) + \int_b^x f_n^{(j+1)}(t) dt - \int_b^x f^{j+1}(t) dt \right| \\ &\leq |f^j(x) - f_n^{(j)}(x)| + |f^j(b) - f_n^{(j)}(b)| + \int_b^x |f_n^{(j+1)}(t) - f^{j+1}(t)| dt \\ &< \frac{\epsilon}{3} + \frac{\epsilon}{3} + (b-a) \frac{\epsilon}{3(b-a)} = \epsilon \end{aligned}$$

が成り立つ. ϵ は任意だから

$$f^j(x) - f^j(b) = \int_b^x f^{j+1}(t) dt, \quad (\forall x \in I, j = 0, 1, 2, \dots, k-1)$$

が示されたことになる. 右辺は連続関数 f^{j+1} の積分だから左辺 f^j は x に関して微分可能関数 (端点は片側微分を考える) となり、導関数は f^{j+1} である. ゆえに $f^0 \in C^k(I)$ が示される. 表記を改めて $f := f^0$, $f^{(j)} := f^j$ ($j = 1, 2, \dots, k$) と表せば、(ii) の結果より

$$\|f_n - f\|_k = \sum_{j=0}^k \sup_{x \in I} |f_n^{(j)}(x) - f^{(j)}(x)| \longrightarrow 0 \quad (n \rightarrow +\infty)$$

が成り立つことで $C^k(I)$ が $\|\cdot\|_k$ をノルムとして Banach 空間をなしていると示される. ■

[5]. $X = C([0, 1])$ を sup-norm の入った Banach 空間とする. $0 < a < 1$, $Y = \{f \in X; [0, a] \text{ 上で } f(t) = 0\}$ とおく.

- (1) Y が X の閉線形部分空間であることを示せ.

- (2) X/Y と $C([0, a])$ (sup-norm を入れる) は Banach 空間として同型であることを示せ.

証明.

- (1) Y が X の線形部分空間であることは, 任意の $f, g \in Y$ と任意の複素数 $\alpha \in \mathbb{C}$ に対して

$$\begin{aligned}(f+g)(t) &= f(t) + g(t) = 0, \quad (\forall t \in [0, a]) \\ (\alpha f)(t) &= \alpha f(t) = 0, \quad (\forall t \in [0, a])\end{aligned}$$

が成り立つことから示される. 後は sup-norm に関して Y が閉集合となっていることを示せばよい. $f_n \in Y$ ($n = 1, 2, 3, \dots$) を sup-norm に関する Cauchy 列とする. $(C([0, 1]), \text{sup-norm})$ の完備性から $(f_n)_{n=1}^\infty$ は或る $f \in C([0, 1])$ に $[0, 1]$ 上で一様に収束するが, もし或る $x \in [0, a]$ について $|f(x)| > 0$ であるならば, この x において $f_n(x) = 0$ ($n = 1, 2, 3, \dots$) であることから

$$0 < |f(x)| = |f_n(x) - f(x)| \leq \sup_{t \in [0, 1]} |f_n(t) - f(t)|, \quad (n = 1, 2, 3, \dots)$$

となり $(f_n)_{n=1}^\infty$ が f に収束することに反する. 従って f も $[0, a]$ 上で 0 でなくてはならず, f は Y に属することになる. これは Y が sup-norm の下で完備ノルム空間となっていることを主張し, 以上より Y は X の閉線形部分空間であると示された.

- (2) X の sup-norm を $\|\cdot\|$ で表現する. X を Y で割った商空間 X/Y の元を $[f]$ (代表元 $f \in X$) で表現して, Y が閉線形部分空間であるから X/Y は

$$\|[f]\|_{X/Y} := \inf_{g \in Y} \|f - g\|, \quad ([f] \in X/Y)$$

をノルムとしてノルム空間となり, さらに $(X, \|\cdot\|)$ が Banach 空間であるから $(X/Y, \|\cdot\|_{X/Y})$ も Banach 空間となる. 任意の $[f] \in X/Y$ について $f_1, f_2 \in [f]$ は $f_1 - f_2 \in Y$ を満たすから即ち

$$f_1(t) = f_2(t) \quad (\forall t \in [0, a])$$

が成り立っている.

$$\|[f]\|_{X/Y} = \inf_{g \in Y} \|f - g\| = \inf_{g \in Y} \sup_{t \in [0, 1]} |f(t) - g(t)| = \sup_{t \in [0, a]} |f(t)|$$

が成り立つことに注意する.

$$\sup_{t \in [0, a]} |f(t)| = \sup_{t \in [0, a]} |f(t) - g(t)| \leq \sup_{t \in [0, 1]} |f(t) - g(t)| \quad (\forall g \in Y)$$

$$\sup_{t \in [0, a]} |f(t)| \leq \inf_{g \in Y} \sup_{t \in [0, 1]} |f(t) - g(t)|$$

$[f]$ の元 の定義域を $[0, a]$ に制限した関数は $C([0, a])$ の或る元に一致する. $C([0, a])$ の任意の元は定義域を $[0, 1]$ に拡張 (例えば $[a, 1]$ 上では適当な一次関数でおく) すれば $X = C([0, 1])$ の或る元に一致するから或る X/Y の或る元 (同値類) に属するしていることになる. 写像 $X/Y \ni [f] \mapsto f|_{[0, a]} \in C([0, a])$ は X/Y から $C([0, a])$ への全単射である. こ

の写像を T と表すとする． T は次の意味で等長である． $\| [f] \|_{X/Y} = \| f|_{[0, a]} \| = \| T[f] \|$ ． T の線型性は

$$\begin{aligned} T([f] + [h]) &= T[f + h] = (f + h)|_{[0, a]} = f|_{[0, a]} + h|_{[0, a]} = T[f] + T[h], \\ T(\alpha[f]) &= T[\alpha f] = (\alpha f)|_{[0, a]} = \alpha f|_{[0, a]} = \alpha T[f] \end{aligned}$$

により示される．ゆえに T は $X/Y \mapsto C([0, a])$ の同型写像であり， X/Y と $C([0, a])$ が Banach 空間として同型であることが示された． ■

[6]. $I = [0, 1]$ とし， $X = C(I)$ を sup-norm の入った Banach 空間とする． $K \in C(I \times I)$ とし， $A = \sup_{(t,s) \in I \times I} |K(t, s)|$ とおく． $u \in X$ に対して $Tu : I \mapsto \mathbb{C}$ を次で定める：

$$Tu(t) = \int_0^t K(t, s)u(s) ds, \quad (t \in I).$$

- (1) $u \in X$ ならば $Tu \in X$ を示せ．
- (2) 写像 $X \ni u \mapsto Tu \in X$ を同じ記号 T であらわすとき， $T \in B(X)$ 及び $\| T^n \| \leq A^n/n!$ ($n \in \mathbb{N}_0$) を示せ．
- (3) $I - T$ は逆作用素を持ち， $(I - T)^{-1} \in B(X)$ であることを示せ．ただし I は X の高等写像である．

証明． X における sup-norm を $\|\cdot\|_X$ と表す．また $T^0 = I$ (恒等写像) として考える．

- (1) $u \in X$ に対して Tu が I 上で連続であることを示せばよい．任意の正数 $\epsilon > 0$ に対して $\delta = \epsilon/A \|u\|_X$ と取れば， $t \in [0, 1)$ と $t+h \in [0, 1] \cap (t, t+\delta)$ に対して

$$\begin{aligned} |Tu(t+h) - Tu(t)| &= \left| \int_0^{t+h} K(t, s)u(s) ds - \int_0^t K(t, s)u(s) ds \right| \\ &\leq \left| \int_t^{t+h} K(t, s)u(s) ds \right| \\ &\leq \int_t^{t+h} |K(t, s)||u(s)| ds \\ &\leq \int_t^{t+h} \sup_{(t,s) \in I \times I} |K(t, s)| \sup_{s \in I} |u(s)| ds \\ &\leq A \|u\|_X h < \epsilon \end{aligned}$$

が成り立つことにより Tu が $[0, 1)$ 上右連続であることが示される．同様にして Tu が $(0, 1]$ 上で左連続であることも示されるから， $Tu \in X$ が示される．

- (2) (1) の結果より $X \ni u \mapsto Tu \in X$ が判っているから，後は写像 $T : X \mapsto X$ の線型性を示せば， T が X を定義域とする線型作用素であること，即ち $T \in B(X)$ が示される． T の線型性は，任意の $u, v \in X$, $\alpha \in \mathbb{C}$, $t \in I$ に対して

$$\begin{aligned} T(u+v)(t) &= \int_0^t K(t, s)(u+v)(s) ds \\ &= \int_0^t K(t, s)(u(s) + v(s)) ds \end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
&= \int_0^t K(t, s)u(s) ds + \int_0^t K(t, s)v(s) ds = Tu(t) + Tv(t), \\
T(\alpha u)(t) &= \int_0^t K(t, s)(\alpha u)(s) ds \\
&= \int_0^t K(t, s)(\alpha u(s)) ds \\
&= \alpha \int_0^t K(t, s)u(s) ds = \alpha Tu(t)
\end{aligned}$$

が成り立つことにより示される．次に $\|T^n\| \leq A^n/n!$ ($n \in \mathbb{N}_0$) を示すが，その準備に次のことを示す．

$$|T^n u(t)| \leq \frac{A^n}{n!} \|u\|_X t^n, \quad (t \in I, n = 1, 2, 3, \dots). \quad (1)$$

証明は数学的帰納法による． $n = 1$ のとき

$$\begin{aligned}
|Tu(t)| &= \left| \int_0^t K(t, s)u(s) ds \right| \\
&\leq \int_0^t |K(t, s)||u(s)| ds \\
&\leq \int_0^t \sup_{(t,s) \in I \times I} |K(t, s)| \sup_{s \in I} |u(s)| ds \\
&\leq A \|u\|_X \int_0^t ds \\
&= A \|u\|_X t
\end{aligned}$$

が成り立つ． $n = k$ のとき (1) を仮定すると，

$$\begin{aligned}
|T^{k+1}u(t)| &= |T(T^k u)(t)| = \left| \int_0^t K(t, s)T^k u(s) ds \right| \\
&\leq \int_0^t |K(t, s)||T^k u(s)| ds \\
&\leq \int_0^t \sup_{(t,s) \in I \times I} |K(t, s)| \frac{A^k}{k!} \|u\|_X s^k ds \\
&\leq \frac{A^{k+1}}{(k+1)!} \|u\|_X t^{k+1}
\end{aligned}$$

となることにより (1) が任意の $n \in \mathbb{N}$ で成立すると示された．従って $t \in I$ についての上限を取れば

$$\|T^n u\|_X = \sup_{t \in I} |T^n u(t)| \leq \sup_{t \in I} \frac{A^n}{n!} \|u\|_X t^n = \frac{A^n}{n!} \|u\|_X, \quad (\forall u \in X, n = 1, 2, 3, \dots)$$

となる． $n = 0$ の場合は， $\|Iu\|_X = \|u\|_X$ ($\forall u \in X$) により $\|T^0\| = \|I\| = 1$ である．以上より $\|T^n\| \leq A^n/n!$ ($n \in \mathbb{N}_0$) となることが示された．

- (3) $(X, \|\cdot\|_X)$ が Banach 空間であるから $B(X)$ も作用素ノルムの下で Banach 空間となっている．従って級数

$$\sum_{n=0}^{+\infty} T^n \quad (2)$$

が収束することの十分条件は

$$\sum_{n=0}^{+\infty} \|T^n\| < +\infty$$

が成り立つことである．今，(2) の結果より

$$\sum_{n=0}^{+\infty} \|T^n\| \leq \sum_{n=0}^{+\infty} \frac{A^n}{n!} = e^A < +\infty$$

が成り立っているから (2) は収束する．つまり

$$T^* := \sum_{n=0}^{+\infty} T^n$$

と表せば T^* は $B(X)$ の元であり，部分和を $T_N := \sum_{n=0}^N T^n$ ($N = 0, 1, 2, \dots$) と表現して $\|T_N - T^*\| \rightarrow 0$ ($N \rightarrow +\infty$) が成り立っていることになる．任意の $u \in X$ に対して

$$\|(TT^* - TT_N)u\|_X = \|TT^*u - TT_Nu\|_X = \|T(T^*u) - T(T_Nu)\|_X = \|T(T^*u - T_Nu)\|_X = \|T(T^* - T_N)u\|_X$$

と

$$\|(T^*T - T_NT)u\|_X = \|T^*Tu - T_NTu\|_X = \|T^*(Tu) - T_N(Tu)\|_X = \|(T^* - T_N)Tu\|_X$$

が成り立つことから，

$$\|TT^* - TT_N\| \leq \|T\| \|T^* - T_N\| \longrightarrow 0 \quad (N \longrightarrow +\infty) \quad (3)$$

と

$$\|T^*T - T_NT\| \leq \|T^* - T_N\| \|T\| \longrightarrow 0 \quad (N \longrightarrow +\infty) \quad (4)$$

が成り立つ．(3) により

$$TT^* = \lim_{N \rightarrow \infty} TT_N = \lim_{N \rightarrow \infty} \sum_{n=1}^{N+1} T^n = \sum_{n=1}^{+\infty} T^n = T^* - I$$

が成り立つから $I = T^* - TT^* = (I - T)T^*$ と表現でき，また (4) により

$$T^*T = \lim_{N \rightarrow \infty} T_NT = \lim_{N \rightarrow \infty} \sum_{n=1}^{N+1} T^n = \sum_{n=1}^{+\infty} T^n = T^* - I$$

も成り立つから $I = T^* - T^*T = T^*(I - T)$ と表現できる．ゆえに $I = (I - T)T^* = T^*(I - T)$ が成り立ち，この等式は $I - T$ が $X \mapsto X$ の全単射であり $T^* \in B(X)$ を逆写像にもつことを示している. ■

[9]. (S, \mathfrak{M}, μ) は σ -有限な測度空間， $X = L^2(S, \mathfrak{M}, \mu) = L^2(\mu)$ とする．可測関数 $a : S \rightarrow \mathbb{C}$ に対して， X 上の掛け算作用素 M_a を次で定める：

$$D(M_a) = \{u \in X \mid au \in X\}, \quad (M_a u)(x) = a(x)u(x) \quad (x \in S).$$

(1) $D(M_a)$ が X で稠密であることを示せ．

- (2) $a \in L^\infty(S, \mathfrak{M}, \mu)$ ならば $M_a \in B(X)$ であり, $\|M_a\| = \|a\|_{L^\infty(\mu)}$ が成り立つことを示せ.
 (3) 逆に $M_a \in B(X)$ ならば $a \in L^\infty(S, \mathfrak{M}, \mu)$ であることを示せ.

証明.

- (1) 任意の $v \in X$ に対して $v_n := vI_{(|a| \leq n)}$ ($n = 1, 2, 3, \dots$) として関数列 $(v_n)_{n=1}^\infty$ を作る. $I_{(|a| \leq n)}$ は定義関数で $|a(x)| \leq n$ となる $x \in S$ の上で 1, その外では 0 となる. 全ての $x \in S$ で $|v_n(x)| \leq |v(x)|$ となるから $(v_n)_{n \in \mathbb{N}} \subset X$ である. さらに $(v_n)_{n \in \mathbb{N}} \subset D(M_a)$ でもあることが示される. 全ての $n \in \mathbb{N}$ について

$$\int_S |a(x)v_n(x)|^2 \mu(dx) = \int_{(|a| \leq n)} |a(x)v(x)|^2 \mu(dx) \leq n^2 \int_S |v(x)|^2 \mu(dx)$$

が成り立つからである. X のノルムを $\|\cdot\|_{L^2(\mu)}$ で表せば

$$\|v - v_n\|_{L^2(\mu)}^2 = \int_S |v(x) - v_n(x)|^2 \mu(dx) = \int_S I_{(|a| > n)}(x) |v(x)|^2 \mu(dx) \quad (5)$$

が成り立つ. a は \mathbb{C} 値であるから, 各点 $x \in S$ で $\lim_{n \rightarrow +\infty} I_{(|a| > n)}(x) = 0$ が成り立つ. 式 (5) の右辺の被積分関数は n に関係なく可積分関数 $|v|^2$ で抑えられ各点で $n \rightarrow +\infty$ で 0 に収束するから, Lebesgue の収束定理を適用すれば

$$\lim_{n \rightarrow +\infty} \|v - v_n\|_{L^2(\mu)}^2 = \lim_{n \rightarrow +\infty} \int_S I_{(|a| > n)}(x) |v(x)|^2 \mu(dx) = \int_S \lim_{n \rightarrow +\infty} I_{(|a| > n)}(x) |v(x)|^2 \mu(dx) = 0$$

が成立する. これは $X = (X, \|\cdot\|_{L^2(\mu)})$ において v の任意の近傍に $D(M_a)$ の元 v_n が存在することを表していて, v は任意に選んでいたから $D(M_a)$ は X で稠密であると示された.

- (2) $a \in L^\infty(S, \mathfrak{M}, \mu)$ ならば, $\|\cdot\|_{L^\infty(\mu)}$ の定義より

$$\|a\|_{L^\infty(\mu)} = \inf \{b \in [0, +\infty) \mid \mu(\{x \in S \mid |a(x)| > b\}) = 0\} < +\infty$$

である. 特に

$$N_m := \left\{ x \in S \mid |a(x)| \geq \|a\|_{L^\infty(\mu)} + \frac{1}{m} \right\}, \quad (m = 1, 2, 3, \dots)$$

と置けば $\mu(N_m) = 0$ ($m = 1, 2, 3, \dots$) であって, μ 零集合 N を

$$N := \bigcup_{m=1}^{\infty} N_m$$

で定めれば

$$|a(x)| \leq \|a\|_{L^\infty(\mu)}, \quad (\forall x \in S \cap N^c) \quad (6)$$

が成り立つ. また $0 < c < \|a\|_{L^\infty(\mu)}$ となるような任意の c については

$$\mu(\{x \in S \mid |a(x)| > c\}) > 0 \quad (7)$$

が成り立つことにも注意しておく．全ての $u \in X$ に対して, (6) により

$$\begin{aligned}
\|M_a u\|_{L^2(\mu)}^2 &= \int_S |a(x)u(x)|^2 \mu(dx) \\
&= \int_{S/N} |a(x)u(x)|^2 \mu(dx) \\
&\leq \int_{S/N} \|a\|_{L^\infty(\mu)}^2 |u(x)|^2 \mu(dx) \\
&= \int_S \|a\|_{L^\infty(\mu)}^2 |u(x)|^2 \mu(dx) = \|a\|_{L^\infty(\mu)}^2 \|u\|_{L^2(\mu)}^2
\end{aligned}$$

が成り立っていることから, $\|M_a\| \leq \|a\|_{L^\infty(\mu)}$ であり $M_a \in B(X)$ が示される．さらに, (S, \mathfrak{M}, μ) が σ -有限な測度空間であるという条件の下では, $\|M_a\| = \|a\|_{L^\infty(\mu)}$ であることが次のように示される． $\|a\|_{L^\infty(\mu)} = 0$ ならば明らかに M_a は零作用素で $0 = \|M_a\| = \|a\|_{L^\infty(\mu)}$ である． $\|a\|_{L^\infty(\mu)} > 0$ である場合, $\|a\|_{L^\infty(\mu)} > \epsilon > 0$ を満たすような ϵ を任意に取り,

$$G_\epsilon := \{x \in S \cap N^c \mid \|a\|_{L^\infty(\mu)} - \epsilon < |a(x)|\}$$

として μ 可測集合 G_ϵ を作る． (7) により, $\mu(G_\epsilon) > 0$ であることが次で示される．

$$\begin{aligned}
\mu(G_\epsilon) &= \mu(\{x \in S \mid \|a\|_{L^\infty(\mu)} - \epsilon < |a(x)|\} \cap N^c) \\
&= \mu(\{x \in S \mid \|a\|_{L^\infty(\mu)} - \epsilon < |a(x)|\}) & (\because \mu(N) = 0) \\
&> 0. & (\because (7)).
\end{aligned}$$

σ -有限の仮定より, 単調増大な μ 可測集合列 $S_1 \subset S_2 \subset S_3 \subset \dots$ で $\mu(S_k) < +\infty$ ($k = 1, 2, 3, \dots$) と $\cup_{k=1}^\infty S_k = S$ を満たすものが存在して

$$0 < \mu(G_\epsilon) = \lim_{k \rightarrow \infty} \mu(S_k \cap G_\epsilon)$$

となるから, 必ず或る S_k に対して

$$r_\epsilon := \mu(S_k \cap G_\epsilon) > 0$$

となっている．

$$u_\epsilon(x) := \begin{cases} 1/\sqrt{r_\epsilon} & x \in S_k \cap G_\epsilon \\ 0 & x \notin S_k \cap G_\epsilon \end{cases}$$

と定義すれば, $\mu(S_k \cap G_\epsilon) < +\infty$ であるから $u_\epsilon \in X$ であって

$$\|u_\epsilon\|_{L^2(\mu)} = 1$$

となっている．この u_ϵ に対して

$$(\|a\|_{L^\infty(\mu)} - \epsilon)^2 < \int_{S_k \cap G_\epsilon} |a(x)u_\epsilon(x)|^2 \mu(dx) = \int_S |a(x)u_\epsilon(x)|^2 \mu(dx) \leq \|a\|_{L^\infty(\mu)}^2$$

により

$$\|a\|_{L^\infty(\mu)} - \epsilon < \|M_a u_\epsilon\|_{L^2(\mu)} \leq \|a\|_{L^\infty(\mu)}$$

が成り立っているから

$$\|a\|_{L^\infty(\mu)} - \epsilon < \sup_{0 \neq u \in X} \frac{\|M_a u\|_{L^2(\mu)}}{\|u\|_{L^2(\mu)}} = \|M_a\| \leq \|a\|_{L^\infty(\mu)}$$

である． $\epsilon > 0$ は任意に取っていたから， $\epsilon \rightarrow 0$ で考えれば

$$\|a\|_{L^\infty(\mu)} = \|M_a\|$$

が示されたことになる．

(3) $M_a \in B(X)$ ならば

$$\int_S |a(x)u(x)|^2 \mu(dx) = \|M_a u\|_{L^2(\mu)}^2 \leq \|M_a\|^2 \|u\|_{L^2(\mu)}^2 = \|M_a\|^2 \int_S |u(x)|^2 \mu(dx)$$

が成立している． (S, \mathfrak{M}, μ) が σ -有限な測度空間であるという条件の下では

$$\mu(\{x \in S \mid |a(x)| > \|M_a\|\}) = 0$$

が成り立つことを示す．これが示されれば $a \in L^\infty(S, \mathfrak{M}, \mu)$ が従う． σ -有限の仮定より，単調増大な μ 可測集合列 $S_1 \subset S_2 \subset S_3 \subset \cdots$ で $\mu(S_k) < +\infty$ ($k = 1, 2, 3, \dots$) と $\bigcup_{k=1}^\infty S_k = S$ を満たすものが存在する． μ 可測集合

$$G := \{x \in S \mid |a(x)| > \|M_a\|\}$$

について，これが仮に $\mu(G) > 0$ であるとする

$$0 < \mu(G) = \lim_{k \rightarrow \infty} \mu(S_k \cap G)$$

により或る $K \in \mathbb{N}$ が存在して $\mu(S_k \cap G) > 0$ ($\forall k > K$) が成立する． $k > K$ を満たす k を選んで

$$u(x) = \begin{cases} 1 & x \in S_k \cap G \\ 0 & x \notin S_k \cap G \end{cases}$$

と置けば， $\mu(S_k \cap G) < +\infty$ であることから $u \in X$ であって，

$$\|u\|_{L^2(\mu)}^2 = \int_S |u(x)|^2 \mu(dx) = \mu(S_k \cap G)$$

が成り立っている． G 上で $|a(x)| > \|M_a\|$ であるから

$$\begin{aligned} \|M_a\|^2 \|u\|_{L^2(\mu)}^2 &= \|M_a\|^2 \int_S |u(x)|^2 \mu(dx) \\ &= \|M_a\|^2 \int_{S_k \cap G} |u(x)|^2 \mu(dx) \\ &< \int_{S_k \cap G} |a(x)u(x)|^2 \mu(dx) \\ &\leq \int_S |a(x)u(x)|^2 \mu(dx) \\ &\leq \|M_a\|^2 \|u\|_{L^2(\mu)}^2 \end{aligned}$$

となるが，最右辺と最左辺を $\|u\|_{L^2(\mu)}^2$ で割ると

$$\|M_a\| < \|M_a\|$$

と矛盾が出る．従って $\mu(G) = 0$ でなくてはならない．

[10]. X をノルム空間, X_0 をその部分空間とする. $i : X_0 \rightarrow X$ を $i(x) = x$ ($x \in X_0$) なる包含写像とする. $T : X^* \ni x^* \mapsto x^* \circ i \in X_0^*$ により線型写像を定める.

- (1) T は連続かつ全射であることを示せ.
- (2) X_0 が X で稠密ならば, T はノルム空間としての同型写像であることを示せ.
- (3) X_0 が X で稠密でないならば, T は単射でないことを示せ.

証明. (1) 任意の $x^* \in X^*$ と $u \in X_0$ に対して

$$|(x^* \circ i)(u)| = |x^*(u)| \leq \|x^*\|_{X^*} \|u\|_X$$

が成り立つから $\|x^* \circ i\|_{X_0^*} \leq \|x^*\|_{X^*}$ ($\forall x^* \in X^*$) が成立する. 従って

$$\|Tx^*\|_{X_0^*} = \|x^* \circ i\|_{X_0^*} \leq \|x^*\|_{X^*} \quad \forall x^* \in X^*$$

となり T が有界作用素であることが示される. T が全射であることは Hahn-Banach の定理による. 任意の $f_0 \in X_0^*$ に対して X 上のセミノルムとして $X \ni x \mapsto \|f_0\|_{X_0^*} \|x\|_X \in \mathbb{C}$ を考えれば作用素ノルムの定義より

$$|f_0(x)| \leq \|f_0\|_{X_0^*} \|x\|_X \quad (\forall x \in X_0)$$

が成り立っているから, Hahn-Banach の定理が適用されて X 上の線型汎関数 $f \in X^*$ で

$$\begin{cases} |f(x)| \leq \|f_0\|_{X_0^*} \|x\|_X & (\forall x \in X), \\ f(x) = f_0(x) & (\forall x \in X_0) \end{cases}$$

を満たすものが存在する. 明らかに $f \circ i = f_0$ が成り立っているから T が全射であることが示された.

- (2) X_0 が X で稠密であるなら, 任意の $f_0 \in X_0^*$ はノルムを変えずに $f \in X^*$ に一意に拡張されるということが示される. まずはこのことを証明する. これが示されれば, (1) の結果と合わせて

- $T : X \mapsto X_0$ は線型全単射である.

- $\|Tx^*\|_{X_0^*} = \|x^* \circ i\|_{X_0^*} = \|x^*\|_{X^*}$

が成り立つことが示され, T がノルム空間としての同型写像であると判る. X_0 が X で稠密であるということにより, 任意の $x \in X$ に対して $x_k \in X_0$ ($k = 1, 2, \dots$) で $\|x_k - x\|_X \rightarrow 0$ ($k \rightarrow +\infty$) となるものを取れる. 任意に $f_0 \in X_0^*$ を取れば, 任意の $m, n \in \mathbb{N}$ に対して

$$|f_0(x_m) - f_0(x_n)| \leq \|f_0\|_{X_0^*} \|x_m - x_n\|_X$$

が成り立つから, 右辺が X_0 の Cauchy 列をなすことにより $(f_0(x_n))_{n=1}^{+\infty}$ も \mathbb{C} の Cauchy 列となる. \mathbb{C} の完備性から $(f_0(x_n))_{n=1}^{+\infty}$ は或る $u \in \mathbb{C}$ に収束する. この u は $x \in X$ に対して一意に定まる. なぜならば, x への別の収束列 $y_k \in X_0$ ($k = 1, 2, \dots$) を取った場合, $(f_0(y_n))_{n=1}^{+\infty}$ の収束先が $v \in \mathbb{C}$ であるとして, 任意の $n, m \in \mathbb{N}$ に対して

$$\begin{aligned} |u - v| &= |u - f_0(x_n) + f_0(x_n) - f_0(y_m) + f_0(y_m) - v| \\ &\leq |u - f_0(x_n)| + |f_0(x_n) - f_0(y_m)| + |f_0(y_m) - v| \\ &\leq |u - f_0(x_n)| + \|f_0\|_{X_0^*} \|x_n - y_m\|_X + |f_0(y_m) - v| \\ &\leq |u - f_0(x_n)| + \|f_0\|_{X_0^*} (\|x_n - x\|_X + \|x - y_m\|_X) + |f_0(y_m) - v| \end{aligned}$$

となるから $n, m \rightarrow +\infty$ で右辺は 0 に収束し, $u = v$ が示されるためである. x に u を対応させる関係は $X \mapsto \mathbb{C}$ の写像となり, この写像を f と表すことにする. f の線型性も次のように示される. 任意の $x, y \in X$, $\alpha, \beta \in \mathbb{C}$ に対して, x, y への収束列 $(x_k)_{k=1}^{+\infty}, (y_k)_{k=1}^{+\infty} \subset X_0$ を取れば $(\alpha x_k + \beta y_k)_{k=1}^{+\infty}$ が $\alpha x + \beta y$ への収束列となるから

$$\begin{aligned} |f(\alpha x + \beta y) - \alpha f(x) - \beta f(y)| &= |f(\alpha x + \beta y) - f_0(\alpha x_k + \beta y_k) + f_0(\alpha x_k) + f_0(\beta y_k) - \alpha f(x) - \beta f(y)| \\ &\leq |f(\alpha x + \beta y) - f_0(\alpha x_k + \beta y_k)| + |\alpha f_0(x_k) - \alpha f(x)| + |\beta f_0(y_k) - \beta f(y)| \\ &\leq |f(\alpha x + \beta y) - f_0(\alpha x_k + \beta y_k)| + |\alpha| |f_0(x_k) - f(x)| + |\beta| |f_0(y_k) - f(y)| \\ &\rightarrow 0 \quad (k \rightarrow +\infty) \end{aligned}$$

が成り立つ. ゆえに $f(\alpha x + \beta y) = \alpha f(x) + \beta f(y)$ ($\forall x, y \in X, \alpha, \beta \in \mathbb{C}$) である. また f は有界な線型作用素である. なぜなら $x \in X_0$ に対しては $x = x_k \in X_0$ ($k = 1, 2, \dots$) が x への一つの収束列になるから $f(x) = \lim_{k \rightarrow +\infty} f_0(x_k) = f_0(x)$ となり f と f_0 は X_0 の上で一致する. (f は f_0 の拡張となっている.) 従って

$$|f(x)| = |f_0(x)| \leq \|f_0\|_{X_0^*} \|x\|_X \quad (\forall x \in X_0)$$

となり $f \in X^*$ であることと $\|f\|_{X^*} \leq \|f_0\|_{X_0^*}$ が判る. さらに作用素ノルムの性質より

$$\|f\|_{X^*} = \sup_{\substack{x \in X \\ \|x\|_X = 1}} |f(x)| \geq \sup_{\substack{x \in X_0 \\ \|x\|_X = 1}} |f(x)| = \sup_{\substack{x \in X_0 \\ \|x\|_X = 1}} |f_0(x)| = \|f_0\|_{X_0^*}$$

も成り立つから結局 $\|f\|_{X^*} = \|f_0\|_{X_0^*}$ であると判る. 以上より任意の $f_0 \in X_0^*$ がノルムを変えないまま或る $f \in X^*$ に拡張されることが示された. 拡張の一意性について, f_0 の X^* への別の拡張 g が存在したとする. つまり g は X 上の有界な線型汎関数で x_0 の上では f_0 と一致するものである. g が f に X 上で完全に一致することを示すには f と g が $X \setminus X_0$ で一致することを見ればよい. 任意の $x \in X \setminus X_0$ に対して $x_k \in X_0$ ($k = 1, 2, \dots$) で $x_k \rightarrow x$ ($k \rightarrow +\infty$) となるものを取れば

$$\begin{aligned} |f(x) - g(x)| &= |f(x) - f(x_k) + g(x_k) - g(x)| \\ &\leq |f(x) - f(x_k)| + |g(x_k) - g(x)| \\ &\leq \|f\|_{X^*} \|x_k - x\|_X + \|g\|_{X^*} \|x_k - x\|_X \\ &\rightarrow 0 \quad (k \rightarrow +\infty) \end{aligned}$$

が成り立つから $f(x) = g(x)$ ($\forall x \in X \setminus X_0$), すなわち $f(x) = g(x)$ ($\forall x \in X$) が成り立つと示された. 任意の $x^* \in X^*$ は $x^* \circ i$ を X^* の元に拡張したものであるから, つまり $x^*, y^* \in X^*$ に対して X_0 上で $x^* \circ i = y^* \circ i$ が成り立っているならば拡張の一意性により X 上で $x^* = y^*$ が成り立つから T は単射である. (全射であることは (1) で示した.) またノルムを変えない拡張であるから $\|Tx^*\|_{X_0^*} = \|x^* \circ i\|_{X_0^*} = \|x^*\|_{X^*}$ の意味で T は等長で, 以上で T が $X^* \rightarrow X_0^*$ の線形全単射, すなわち同型写像であることが示された.

- (3) X_0 が X で稠密でない場合, X_0 の $\|\cdot\|_X$ による閉包を $[X_0]^a$ と表せば $X \setminus [X_0]^a \neq \emptyset$ である. 任意の $x^*, y^* \in X^*$ に対して定義域を $[X_0]^a$ に制限したものを $x^*|_{[X_0]^a}, y^*|_{[X_0]^a}$ と表わせばこれは $[X_0]^a$ 上の有界な線型汎関数であり, もちろん $x^*|_{[X_0]^a} \circ i = x^* \circ i$ かつ $y^*|_{[X_0]^a} \circ i = y^* \circ i$ で

ある。従って (2) の結果により

$$x^* \circ i = y^* \circ i \Leftrightarrow x^*|_{[X_0]^a} = y^*|_{[X_0]^a}$$

が成り立つ。つまり $X \setminus [X_0]^a$ の上での x^*, y^* の値に関係なく、 X_0 の上で一致するための必要十分条件は $[X_0]^a$ の上で一致していることである。 $x^* \in X^*$ を任意にとって (零写像でないものを取る) 2 つの写像 x_1^*, x_2^* を

$$x_1^*(x) = \begin{cases} x_1(x) & (x \in [X_0]^a) \\ \|x^*\|_{X^*} x & (x \in X \setminus [X_0]^a) \end{cases}, \quad x_2^*(x) = \begin{cases} x_1(x) & (x \in [X_0]^a) \\ -\|x^*\|_{X^*} x & (x \in X \setminus [X_0]^a) \end{cases}$$

と定義すれば、 X_0 が部分空間であるから $\emptyset \neq X \setminus [X_0]^a$ かつ $0 \notin X \setminus [X_0]^a$ により $x_1^* \neq x_2^*$ が成り立っている。

[11].

- (1) c_0 は l^∞ の閉線形部分空間であることを示せ。
- (2) l^∞ と c_0 が可分であるかどうか判定せよ。

証明.

- (1) まず $c_0 \subset l^\infty$ であることを示す。 $\forall a = (a_n)_{n=1}^\infty \in c_0$ は収束点列である。任意の $\epsilon > 0$ に対して或る $N \in \mathbb{N}$ を取れば、 N 以降の $n \in \mathbb{N}$ については $|a_n| < \epsilon$ で抑えられるから

$$\sup_{n \in \mathbb{N}} |a_n| \leq \max\{|a_1|, |a_2|, \dots, |a_N|, \epsilon\} < +\infty$$

が成り立ち $a \in l^\infty$ が判る。従って $c_0 \subset l^\infty$ である。つぎに c_0 が線型空間 l^∞ の線形部分空間であることを示す。任意の $a = (a_n)_{n=1}^\infty, b = (b_n)_{n=1}^\infty \in c_0, \alpha \in \mathbb{C}$ に対し

$$\begin{aligned} |a_n + b_n| &\leq |a_n| + |b_n| \longrightarrow 0 \quad (n \longrightarrow +\infty), \\ |\alpha a_n| &= |\alpha| |a_n| \longrightarrow 0 \quad (n \longrightarrow +\infty) \end{aligned}$$

が成り立つことにより $a + b \in c_0$ と $\alpha a \in c_0$ が示される。従って c_0 は l^∞ の線形部分空間である。最後に c_0 が l^∞ で閉集合となっていることを示す。 l^∞ は $\|\cdot\|_{l^\infty}$ をノルムとして Banach 空間となっているから、その部分空間である c_0 が $\|\cdot\|_{l^\infty}$ をノルムとして Banach 空間をなしていることを示せばよい。 $a^{(n)} = (a_m^{(n)})_{m=1}^\infty \in c_0$ ($m = 1, 2, 3, \dots$) を $\|\cdot\|_{l^\infty}$ に関する Cauchy 列とする。 $(l^\infty, \|\cdot\|_{l^\infty})$ が完備であるから、 $(a^{(n)})_{n=1}^\infty$ は或る $a^* = (a_m^*)_{m=1}^\infty \in l^\infty$ に m に関して一様に収束している。つまり任意の $\epsilon > 0$ に対して或る $N \in \mathbb{N}$ が存在して、全ての $n > N$ について

$$\|a^{(n)} - a^*\|_{l^\infty} = \sup_{m \in \mathbb{N}} |a_m^{(n)} - a_m^*| < \epsilon \quad (8)$$

が成り立っている。 $a^* = (a_m^*)_{m=1}^\infty$ が c_0 の元であることは帰謬法で示す。 $a^* \notin c_0$ であると仮定すると、或る $\delta > 0$ に対しては、いかなる $N \in \mathbb{N}$ を取っても必ず $n > N$ なる自然数で

$$|a_n^*| \geq \delta$$

を満たすものが存在する． $(a_m^*)_{m=1}^\infty$ の部分列 $(a_{m_k}^*)_{k=1}^\infty$ を

$$|a_{m_k}^*| \geq \delta, \quad (m_k < m_{k+1}, k = 1, 2, 3, \dots)$$

を満たすものとして取ることが出来て，(8) により或る $N_\delta \in \mathbb{N}$ を取れば，全ての $n > N_\delta$ で

$$\sup_{k \in \mathbb{N}} |a_{m_k}^{(n)} - a_{m_k}^*| < \frac{\delta}{2}$$

が成立することになる． $n > N_\delta$ 番目の数列 $a^{(n)} = (a_m^{(n)})_{m=1}^\infty$ は c_0 の元であるから，或る $N_\delta^n \in \mathbb{N}$ が存在して全ての $p > N_\delta^n$ に対し

$$|a_p^{(n)}| < \frac{\delta}{2}$$

となるはずであるが， $m_1 < m_2 < m_3 < \dots \rightarrow +\infty$ であるから $m_k > N_\delta^n$ となるような添数 m_k が存在してしまい，

$$\frac{\delta}{2} \leq |a_{m_k}^*| - \frac{\delta}{2} < |a_{m_k}^{(n)}| < \frac{\delta}{2}$$

と矛盾が出る．従って $a^* \in c_0$ であるべきで，これは c_0 が $\|\cdot\|_\infty$ をノルムとして完備であることを示したことになる．ゆえに c_0 は l^∞ の閉線形部分空間である．

- (2) 結論は， l^∞ は可分ではなく c_0 は可分である．順番に示す． l^∞ の部分集合として 0 と 1 のみで成る数列全体

$$M := \{a \in l^\infty \mid a = (a_n)_{n=1}^{+\infty}, a_n \in \{0, 1\}, n = 1, 2, 3, \dots\}$$

を考える．また任意の $a = (a_n)_{n=1}^\infty, b = (b_n)_{n=1}^\infty \in M$ に対し

$$\|a - b\|_\infty = \sup_{n \in \mathbb{N}} |a_n - b_n| = \begin{cases} 1 & (a \neq b) \\ 0 & (a = b) \end{cases}$$

が成り立つから， M の異なる 2 元の $\|\cdot\|_\infty$ による距離は 1 で固定されている．もし l^∞ が可分であるとすれば， $\|\cdot\|_\infty$ に関して l^∞ で稠密な可算部分集合 C が存在することになる．任意の $a \in M$ に対してその $1/2$ 近傍 (sup-norm) の内部に C の元が存在していることになるから，そのうちの一つを c_a と表し対応を付ける． $a \in M$ に対応する $c_a \in C$ は他の M の元の $1/2$ 近傍に属することはない．もし c_a が或る $a \neq b \in M$ の $1/2$ 近傍に入ると

$$1 = \|a - b\|_\infty \leq \|a - c_a\|_\infty + \|b - c_a\|_\infty < \frac{1}{2} + \frac{1}{2} = 1$$

と矛盾ができるからである．即ち M から C への対応関係 $M \ni a \mapsto c_a \in C$ は単射である．ここで M の濃度 $2^{\mathbb{N}}$ が連続体濃度であることに注意すれば，単射の存在により C の濃度は連続体濃度以上で C が可算集合であることに反する．従って l^∞ は可分ではない．一方で c_0 は $\|\cdot\|_\infty$ をノルムとして可分なノルム空間をなす． c_0 の可算部分集合を

$$S := \left\{ b \in c_0 \mid b = (\alpha_n + i\beta_n)_{n=1}^{+\infty}, \begin{cases} \alpha_n, \beta_n \in \mathbb{Q}, & n = 1, 2, \dots, N, \\ \alpha_n = \beta_n = 0, & n \geq N + 1, \end{cases} (N = 1, 2, 3, \dots) \right\}$$

として取る．ただし i は $i^2 = -1$ なる虚数単位で \mathbb{Q} は有理数全体である．任意の $a = (a_n)_{n=1}^{+\infty} \in c_0$ について，任意の正数 $\epsilon > 0$ に対して或る $N \in \mathbb{N}$ を取れば全ての $n > N$ で

$$|a_n| < \epsilon$$

が成り立つから、後は $(a_n)_{n=1}^N$ の部分で

$$\sup_{n=1,2,\dots,N} |a_n - b_n| < \epsilon$$

となるように S の元 $b = (b_n)_{n=1}^{+\infty}$ ($b_n = 0, n > N$) を取れば

$$\|a - b\|_{l^\infty} < \epsilon$$

が成り立つ。即ち S が c_0 において $\|\cdot\|_{l^\infty}$ に関して稠密であるとわかり、 c_0 が可分であると示された。 ■

[12]. $a = (a_n)_{n=1}^\infty \in l^1$ に対して $T_a : c_0 \mapsto \mathbb{C}$ を次で定める:

$$T_a(x) = \sum_{n=1}^{\infty} a_n x_n \quad (x = (x_n) \in c_0).$$

- (1) $\forall a = (a_n) \in l^1, T_a \in c_0^*$ かつ $\|T_a\| = \|a\|_{l^1}$ であることを示せ.
- (2) $T : l^1 \ni a \mapsto T_a \in c_0^*$ は Banach 空間としての同系写像であることを示せ.

証明.

- (1) 設問 [11] の結果により、 T_a の定義域である c_0 は $\|\cdot\|_{l^\infty}$ をノルムとして l^∞ の閉線型部分空間であり、よって Banach 空間である。このことに留意して以下進む。 $a = (a_n)_{n=1}^\infty \in l^1$ を任意に取って固定する。任意の $x = (x_n) \in c_0$ に対して

$$\sum_{n=1}^{\infty} |a_n x_n| \leq \sum_{n=1}^{\infty} |a_n| \|x\|_{l^\infty} = \|a\|_{l^1} \|x\|_{l^\infty} < +\infty \quad (9)$$

となり級数 $T_a(x)$ ($\forall x \in c_0$) は有限確定するから、任意の $x = (x_n), y = (y_n) \in c_0, \alpha \in \mathbb{C}$ に対して以下に示す式変形が正当化される。

$$\sum_{n=1}^{+\infty} a_n x_n + a_n y_n = \sum_{n=1}^{+\infty} a_n x_n + \sum_{n=1}^{+\infty} a_n y_n, \quad \sum_{n=1}^{+\infty} \alpha a_n x_n = \alpha \sum_{n=1}^{+\infty} a_n x_n, \quad \left| \sum_{n=1}^{+\infty} a_n x_n \right| \leq \sum_{n=1}^{+\infty} |a_n| |x_n|.$$

従って任意に $x = (x_n), y = (y_n) \in c_0$ と $\alpha \in \mathbb{C}$ を取れば、

$$\begin{aligned} T_a(x+y) &= \sum_{n=1}^{\infty} a_n(x_n + y_n) = \sum_{n=1}^{\infty} (a_n x_n + a_n y_n) = \sum_{n=1}^{\infty} a_n x_n + \sum_{n=1}^{\infty} a_n y_n = T_a x + T_a y, \\ T_a(\alpha x) &= \sum_{n=1}^{\infty} a_n(\alpha x_n) = \sum_{n=1}^{\infty} (a_n \alpha) x_n = \sum_{n=1}^{\infty} (\alpha a_n) x_n = \sum_{n=1}^{\infty} \alpha (a_n x_n) = \alpha \sum_{n=1}^{\infty} a_n x_n = \alpha T_a(x) \end{aligned}$$

により T_a の線型性が示されるから、 T_a は $c_0 \rightarrow \mathbb{C}$ の線型汎関数である。有界性は式 (9) により

$$|T_a(x)| \leq \|a\|_{l^1} \|x\|_{l^\infty}$$

から $\|T_a\| \leq \|a\|_{l^1}$ となるとわかる。ゆえに $T_a \in c_0^*$ ($\forall a \in l^1$) である。また $\|T_a\| = \|a\|_{l^1}$ について、 $a = 0$ の場合は T_a が零作用素になるから明らかに成り立つ。 $a \neq 0$ の場合、任意の $\|a\|_{l^1} > \epsilon > 0$ に対して或る $N \in \mathbb{N}$ が存在して

$$\|a\|_{l^1} - \epsilon < \sum_{n=1}^N |a_n|$$

とできる. $x \in c_0$ を

$$x_n = \begin{cases} \overline{a_n}/|a_n| & a_n \neq 0, \text{ and } n \leq N \\ 0 & a_n = 0, \text{ or } n > N \end{cases}$$

となっているもので取れば,

$$\|a\|_{l^1} - \epsilon < \sum_{n=1}^N |a_n| = \sum_{n=1}^{\infty} a_n x_n = T_a(x) = |T_a(x)|$$

が成立することになる. $\|x\|_{l^\infty} = 1$ であることに注意すれば

$$\|a\|_{l^1} - \epsilon < T_a(x) = \frac{|T_a(x)|}{\|x\|_{l^\infty}} \leq \sup_{0 \neq y \in c_0} \frac{|T_a(y)|}{\|y\|_{l^\infty}} = \|T_a\| \leq \|a\|_{l^1}$$

が成り立ち, ϵ が任意であるから, $a = 0$ の場合と合わせて $\|T_a\| = \|a\|_{l^1}$ ($\forall a \in l^1$) が示された.

- (2) まず, l^1 は $\|\cdot\|_{l^1}$ をノルムとして Banach 空間となり, c_0^* は T_a の値域 \mathbb{C} が Banach 空間であるから作用素ノルムにより Banach 空間となっている. 写像 T が

$$\|Ta\| = \|T_a\| = \|a\|_{l^1} \quad (\forall a \in l^1)$$

の意味で等長であることは (1) で示してあるから, 後は T が線型全単射であることを証明すればよい. 任意の $a = (a_n), b = (b_n) \in l^1, \alpha \in \mathbb{C}$ に対して

$$\begin{aligned} \sum_{n=1}^{\infty} (a_n + b_n)x_n &= \sum_{n=1}^{\infty} (a_n x_n + b_n x_n) = \sum_{n=1}^{\infty} a_n x_n + \sum_{n=1}^{\infty} b_n x_n, \\ \sum_{n=1}^{\infty} (\alpha a_n)x_n &= \sum_{n=1}^{\infty} \alpha(a_n x_n) = \alpha \sum_{n=1}^{\infty} a_n x_n \end{aligned}$$

が成り立つから

$$\begin{aligned} T(a+b) &= T_{a+b} = T_a + T_b = Ta + Tb \\ T(\alpha a) &= T_{\alpha a} = \alpha T_a = \alpha Ta \end{aligned}$$

も成り立つことにより T の線型性が示される. また $a = (a_n), b = (b_n) \in l^1$ に対して, $a \neq b$ であるなら或る $N \in \mathbb{N}$ 番目で $a_N \neq b_N$ となっているはずであるから,

$$x_N = \begin{cases} 1 & n = N \\ 0 & n \neq N \end{cases}$$

となる $x = (x_n) \in c_0$ に対して

$$T_a(x) = a_N \neq b_N = T_b(x)$$

となり, T が単射であることが示される. 最後に T が全射であることを示す. 任意に $L \in c_0^*$ を取る. 或る $a \in l^1$ に対して L が T_a に一致することを見ればよい. Kronecker のデルタを用いて

$$e_n := (\delta_{jn})_{j=1}^{\infty}$$

で表現される e_n ($n = 1, 2, 3, \dots$) は c_0 の元であり, 各 $n = 1, 2, 3, \dots$ に対して

$$a_n := L(e_n) \quad (10)$$

とおく. 任意の $x = (x_n) \in c_0$ に対して

$$x^{(N)} = \sum_{n=1}^N x_n e_n, \quad (N = 1, 2, 3, \dots)$$

として作られる数列の族 $(x^{(N)})_{N=1}^{\infty}$ は l^{∞} において収束し, $x^{(N)} \rightarrow x$ ($N \rightarrow +\infty$) が成り立つ. これは $x = (x_n)$ が収束数列であることによる. 任意の $\epsilon > 0$ に対して或る $N \in \mathbb{N}$ を選べば

$$|x_n| < \epsilon, \quad (\forall n > N)$$

が成り立つから, $n > N$ なる任意の自然数 n に対して

$$\|x - x^{(N)}\|_{l^{\infty}} = \sup_{m>n} |x_m| < \epsilon$$

となり, $x^{(N)} \rightarrow x$ ($N \rightarrow +\infty$) が示されるのである. L が有界線型汎関数であることも併せれば

$$|L(x) - L(x^{(N)})| \leq \|L\| \|x - x^{(N)}\|_{l^{\infty}} \rightarrow 0 \quad (N \rightarrow +\infty)$$

により

$$L(x) = \lim_{N \rightarrow +\infty} L(x^{(N)}) = \lim_{N \rightarrow +\infty} \sum_{n=1}^N L(x_n e_n) = \lim_{N \rightarrow +\infty} \sum_{n=1}^N a_n x_n = \sum_{n=1}^{+\infty} a_n x_n \quad (\forall x \in c_0)$$

が成り立つ. 後は (10) で定義した複素数列 $(a_n)_{n=1}^{\infty}$ が l^1 に属していることを示せば, 写像 $L: c_0 \mapsto \mathbb{C}$ が $T_a: c_0 \mapsto \mathbb{C}$ に一致していると証明される. これは次のように示される. $a_n \neq 0$ ($\exists n \leq M$) となるような $M \in \mathbb{N}$ を取って, この M に対して $x = (x_n) \in c_0$ として

$$x_n = \begin{cases} \overline{a_n}/|a_n| & a_n \neq 0, \text{ and } n \leq M \\ 0 & a_n = 0, \text{ or } n > M \end{cases}$$

となるものを取れば,

$$L(x) = \lim_{N \rightarrow +\infty} \sum_{n=1}^N a_n x_n = \sum_{n=1}^M |a_n|$$

が成り立つ. $\|x\|_{l^{\infty}} = 1$ であることに注意すれば

$$\sum_{n=1}^M |a_n| = L(x) = |L(x)| \leq \|L\| \|x\|_{l^{\infty}} = \|L\|$$

となる. M は任意に大きく取って問題ないから,

$$\sum_{n=1}^{M'} |a_n| \leq \|L\|, \quad (\forall M' \geq M)$$

が成り立ち, 従って

$$\sum_{n=1}^{\infty} |a_n| \leq \|L\|$$

となることにより $a \in l^1$ であることが示された.

[13]. $1 < p < \infty$ とする. l^p の点列 $x(1), x(2), x(3), \dots$ (ただし $x(j) = (x(j)_n)_{n=1}^\infty$) と $x = (x_n)_{n=1}^\infty \in l^p$ に対し, 次の (i), (ii) が同値であることを示せ:

- (1) $w\text{-}\lim_{n \rightarrow \infty} x(j) = x$.
 (2) $\{x(j); j \in \mathbb{N}\}$ は有界でかつ $\forall n \in \mathbb{N} \lim_{j \rightarrow \infty} x(j)_n = x_n$.

証明.

l^p の共役空間 まず l^p の共役空間の任意の元 $f \in (l^p)^*$ が或る $v \in l^q$ に対応して

$$f(x) = \sum_{n=1}^{\infty} x_n v_n, \quad (x = (x_n)_{n=1}^\infty \in l^p, v = (v_n)_{n=1}^\infty \in l^q)$$

で表現されることを示す.

- (1) \Rightarrow (2) 任意の $f \in (l^p)^*$ に対して, f には或る $v = (v_n)_{n=1}^\infty \in l^q$ が対応して

$$f(x(j)) = \sum_{n=1}^{\infty} x(j)_n v_n$$

と表すことができる. 弱収束の仮定より任意の $\epsilon > 0$ に対してある $J \in \mathbb{N}$ が存在して, 全ての $j > J$ で

$$|f(x(j)) - f(x)| < \epsilon$$

が成り立っている. $x(j), x \in l^p, v \in l^q$ であるから Hölder の不等式により

$$|f(x(j)) - f(x)| = \left| \sum_{n=1}^{\infty} x(j)_n v_n - \sum_{n=1}^{\infty} x_n v_n \right| = \left| \sum_{n=1}^{\infty} (x(j)_n - x_n) v_n \right| \leq \|x(j) - x\|_p \|v\|_q$$

と表現することができる.

- (2) \Rightarrow (1) $x(j)$ が有界であるから, 或る正数 M が存在して

$$\sup_{j \in \mathbb{N}} \|x(j)\|_p \leq M$$

が成り立っている. 即ち

$$\sup_{j, n \in \mathbb{N}} |x(j)_n| < +\infty$$

が成り立っていることになる. また $\forall n \in \mathbb{N} \lim_{j \rightarrow \infty} x(j)_n = x_n$ の意味は $n \in \mathbb{N}$ に関して $x(j)$ が x に各点収束しているということである. $f \in (l^p)^*$ を任意に取り, $f(x(j)), f(x)$ が $v = (v_n)_{n=1}^\infty \in l^q$ を用いて

$$f(x(j)) = \sum_{n=1}^{\infty} x(j)_n v_n, \quad f(x) = \sum_{n=1}^{\infty} x_n v_n$$

と表現できているとする. 測度空間 $(\mathbb{N}, 2^{\mathbb{N}}, \nu)$ ($\nu(n) = v_n$) における積分の収束を考えているとみなせば, 以上の仮定により Lebesgue の優収束定理が適用できて

$$\lim_{j \rightarrow \infty} \sum_{n=1}^{\infty} x(j)_n v_n = \sum_{n=1}^{\infty} \lim_{j \rightarrow \infty} x(j)_n v_n = \sum_{n=1}^{\infty} x_n v_n$$

が成り立つ. これは $f(x(j)) \rightarrow f(x) (j \rightarrow +\infty)$ を意味していて, 線型汎関数 $f \in (l^p)^*$ は任意に取っているから $w\text{-}\lim_{n \rightarrow \infty} x(j) = x$ が示されたことになる.